

## 低温度星の分光学とともに



辻 隆 (天文学教育研究センター)  
ttsuji@mtk.ioa.s.u-tokyo.ac.jp

大学院に進学し藤田良雄先生のご指導で始めた低温度星の分光学を、遂に40年近く続けることになってしまった。丁度、私が大学院に進学した年(1960年)には、ようやくわが国でも口径188センチの反射望遠鏡を擁する岡山天体物理観測所(当時の本学東京天文台所属)が完成し、私の修士論文はこの望遠鏡で撮られたスペクトルに基づくものであった。良く調べたわけではないが、これは多分この望遠鏡による研究成果としてレフリー誌に載った最初の論文ではないかと思っている。それまでわが国では自前でこのような物理観測をすることは不可能であったことを思えば、大変幸運な出発であったと言える。その後も、岡山はもとより、米国のウイルソン山天文台、キット・ピーク天文台、フランスのオート・プロバンス天文台などでも観測を続け、昨年11月に岡山で行なった観測が最後となった。なかでも、キット・ピーク天文台でフーリエ変換分光器を使って行った高分解能の赤外分光観測は大変印象深いものであった。

何年前かに医学部の先生が定年退官に際してご自分の誤診率を発表され、話題になったことを覚えている。私の仕事もこれら星のスペクトルにより星を分光的に診断すると言う点ではあまり変わらないとも言えるかもしれない。誤診をしても人命に関わるわけではないが、誤った診断は困る点では変りはない。しかし、現在若干うしろめたく感ずるのは、このようにして今までに観測したスペクトルでまだ解析していないものがかなりあると言う点である。誤診率のまえに診断率でも出してみるべきかもしれない。しかし、とくに低温度星のスペクトルは原子のみならず分子のスペクトル線が多数重合した複雑なものが多く、その解析の方法論すら十分確立されているわけではなかった。従って、解析があまり進まなかった言い訳になるが、観測したスペクトルの解析のまえにまずこれらの解析の方法、特にこれらの星の大気構造の研究を進める必要があった。幸い私が研究を始めた頃は

丁度電子計算機が実用になり始めた時期にも一致し、始めは物理学教室で開発されたパラメトロン計算機などを使わせていただいたが、その後は当時の大型計算機センターにも大変お世話になった。しかし、私が行なう程度の計算は今ではパソコンでも出来てしまい、夕方5時になると閉まってしまう計算機センターで苦勞した頃と比べると隔世の感がある。その後、外国に行ってみるとこのような時間の制約は全く無く、同じ計算機でも数倍は有効に使えたという感じがしたことを思い出す。これはまだ些細な例で、このように硬直化したシステムによる無駄はその後もいたるところで経験することになるが、なんとかならないであろうか。

やがて、野辺山45m電波望遠鏡の完成により、ミリ波領域でも低温度星の分光観測ができるようになり、私も何度か観測させていただいた。進化の進んだ星が放出する膨大な分子雲からCOやHCNなどの分子線が予想以上に多くの星で観測され、またその線輪郭から双極ガス流の存在を見出すなど、新しい領域での興味ある観測を経験することができた。しかし、このような膨大なガス流が何処でどのようにして発生するかはまだよく分かっていない。このような問題の解明には赤外領域の観測が有効であるが、ヨーロッパ宇宙機構(ESA)の赤外線宇宙天文台(ISO)計画にわが国の宇宙研が協力することになり、この今世紀の最初にして最後の本格的な赤外スペース天文台で観測できることになった。このISOは予定より数年遅れて、一時は私の定年までに間に合うか心配したが、ようやく1995年11月に打ちあげられた。そろそろ液体ヘリウムが無くなるので寿命が尽きるが、地球大気で邪魔されずに撮られた低温度星の赤外スペクトルには、今まで考えていた大気構造モデルでは全く説明できない事実が次々と観測された。流出ガス流の起源を理解する鍵もこれらにスペクトルに隠されているかも知れないが、星といえどもまだ汲み尽くすにはほど遠いことを思い知らせれる。また、これまでの天体分光学は、いわば‘星との孤独なる対話’とでもいう感じの個人的な研究スタイルでも良かったが、このような全国共同利用や国際協力による大型観測装置に大きく依存する巨大科学となった天文学では、好むと好まざるとに拘らず、より組織的な研究スタイルのほうが能率は良いことは確かなようである。

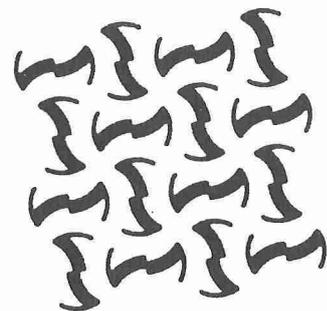
もともと天体分光学は、スペクトルから天体の化学組

成が決定可能であることを1859年に Kirchhoff と Bunsen が見出したことにより誕生したが、このことは光が届く限りの全宇宙の化学分析が原理的に可能であることを示したことでもある。その後1世紀半を経た今日、全スペクトル領域にわたる高性能の観測装置が進歩し、特に我が国の「すばる」をはじめとする大望遠鏡により銀河系内の微光天体や系外銀河のみならずクエサーを光源として宇宙の果ての分光も可能となろうとしている。文字どおり全宇宙の化学分析が現実のものとなるよう、次の時代を背負う方々のご活躍に期待したい。これが実現すれば、天体分光學に携わる者にとってまさに冥利に尽きると言うことになるが、天体化学分析の方法や精度にはなお多くの問題があり前途は多難である。また、宇宙のダークマターの有力候補の一つとして、最近ようやくその実在が証明された褐色矮星は、低温度星の延長としても大変興味ある天体である。このような天体の大気では分子のみならずダストが形成され、ここでは惑星大気におけるような気象的現象までも起きている可能性があり、気象学の重要性に今頃気づいたりした。低温度星の分光学的研究を始めてみると、未解決の問題や興味ある問題が山積して三十数年はあっという間に過ぎてしまい、遂にこの分野に留まって定年を迎えることになってしまった。ほとんど悠久の星や宇宙にたいして三十数年はあまりに短いというのは言い訳にもならないであろうが、今後もしばらくは現在とほぼ同じペースで仕事を続けたいと思っている。

最後の10年間を過ごした天文学教育研究センターは、ようやく来年度から名前だけは大学院化されるということなので、私は理学部教官のまま定年を迎える最後の一人ということになる。このように理学部附属ではなく理学系研究科附属になるが、センターは実際に学部教育にも大きく関わっており、またこれはセンターというより

は天文学にとっても重要なことである。一般に学生が大学院に入る頃にはもう将来の研究テーマは決まっていることが多いようなので、学部教育が将来の研究分野に大きく影響するわけであり、鉄は熱いうちに打たなければならない。従って、学部兼担が人員・予算上で保証されないような大学院化では困ることは明記しておく必要がある。理学部改組の議論を聞いているとセンターと言うのは扱い難いものようであるが、改革は実情にそくして行へばよいのであり学部・大学院教育でセンターとそれ以外とに差別をつける理由は全くない。また、私はセンター設立当初からのスタッフの一人として、力不足で至らないことが多かったことを大変申し訳なく思っている。特に、多くの方々にお力添えいただいたが、設立後10年を経た現在、いまだに研究・教育の基盤となる建物すらできなかったことは大変心残りである。わがセンターは依然としてこのように様々な困難を抱えている。しかし、巨大科学となりつつある現代天文学において、将来を担う研究者を養成しつつ独自性ある観測的研究を自由に発展させることのできる大学天文台としてセンターの役割はますます重要であり、センター成人期にむけて所員の方々の一層のご活躍を期待するとともに理学部・理学系研究科の皆様のご支援をお願いしたい。

思い出してみると、1964年に天文学教室のスタッフに加えていただき、1978年に当時まだ本学に属していた東京天文台に移り、1988年に同台が国立天文台に改組された機会に設立されたセンターに加わることになり再び理学部のお世話になった。同じ東京大学の中ではあったが、少しずつ雰囲気の間異なるところでほぼ10年ごとに気分を新たにして仕事ができただのは大変幸いであった。各々の場所でお世話になった方々、及び様々の機会にお世話になった多くの方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後の皆様の一層のご健勝をお祈り致します。



## 辻先生を送る

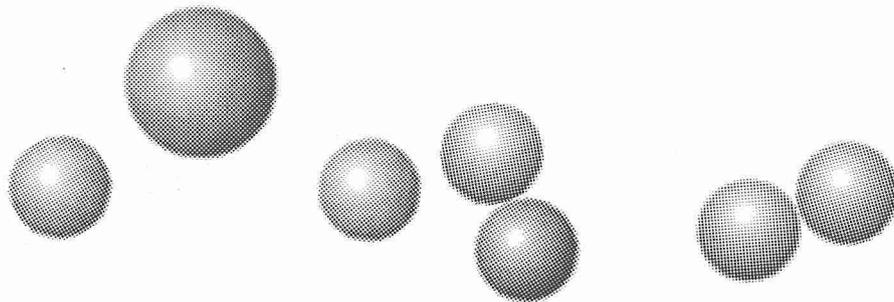
祖父江 義明 (天文学教育研究センター)  
sofue@sof.mtk.ioa.s.u-tokyo.ac.jp

辻先生は赤い星、低温度星の世界的な大家である。赤い星には2種類ある。明るくて赤い巨星と、とても暗くて1つ1つは小質量だけれども、やたら数が多くて銀河系の質量のほとんどを占めている星である。赤色巨星のほうは星間物質に含まれるさまざまな分子の製造元になっていて、分子線を使って銀河系や星形成領域を研究する私のようなミリ波電波天文学者が大いにおかげをこうむっている天体である。小質量星は、これまた銀河系の質量の大半を占めていて、銀河の力学や、最近はやりのダークハロー、あるいはMACHO（重力レンズ効果でしか見えない暗い星）の研究において、またまた本質的な存在である。こう考えると、分子線をつかって銀河の回転を調べ、銀河質量の分布を調べるという私たちの銀河研究も、ことごとく低温度星あってのものだということがわかる。銀河研究者が文字通り雲（星雲）をつかむような話を、安心して展開していただけるのも、ひとえに我が辻先生が、じつに精密科学としてこれらの星の研究を徹底して行ってこられたおかげである。退官されるにあたり、先生が近くにおられることが、一見畑がちがうかのように見える銀河研究者にとって、どれだけ有り難く、心強かったかを、あらためて感じている。

太陽のフラウンホーファー線もたくさんあるが、低温度星ともなると分子の吸収線がさらに増加して、気の遠くなるくらいの数のスペクトル線が観測される。辻先生は博士論文で、分子の解離平衡定数を計算され、低温度星大気の平衡計算とスペクトル解析を詳しく行ない大気の組成を明らかにされた。これは大変な大計算で、当時私は学生であったが、浅野地区の大型計算機センター使用ランキングのトップは常に辻先生であった。銀河形成のオーダーエスティメーションに毛の生えたことしかやっ

ていなかった私にとって、畏敬のまのであったのをよく覚えている。(余談だが、最近の銀河計算術は幸か不幸かそのころの比ではなくなった。) その後も平衡定数と計算を改訂され、また、計算から示唆される分子をとり入れてスペクトル観測とあわせて、「辻の大気モデル」あるいは「辻モデル」とよばれている有名なモデルを構築された。これらの仕事によって先生は、昭和59年に学士院賞を受賞されている。また関連の仕事を天文学レビュー誌にまとめられ、その方面のバイブルとなっている。最近では、この計算コードをもとに、褐色矮星の赤外スペクトルを予言してMACHO研究などに大きく寄与され、またISO（赤外線衛星天文台）による星の観測を組織して、巨星や超巨星の恒星大気の外側に暖かい分子の殻を発見されてニュースになった。ISO計画には当初から関わり、ご自身の研究のためばかりでなく、日本の天文学全体のために尽力され、多くの若手の育成に貢献された。

辻先生は天文学科の博士課程を経て、同教室、東京天文台に勤務された後、昭和63年に理学部天文学教育研究センターの発足に尽力され、同教授、木曾観測所長、センター長を歴任されて運営面での手腕も発揮された。センター長時代には、同センターに建物がないことを、ご自分のためよりも所員のために心から心配され、熱心に働きかけて下さった。おかげで、天文センターの建物を何とかしようという気運も大いに高まり、今も事務方に大変な努力を続けていただいている。新しい建物ができた暁には、辻先生に頻繁にお越しいただき、研究が続けられ、いままでにも増して後進を叱咤していただきたいと願っている。



## 東京大学を去るにあたって



岡崎 廉治 (化学専攻)

okazaki@chem.s.u-tokyo.ac.jp

昭和34年4月に理学部化学科の学生として駒場から進学してきて以来、アメリカに滞在した二年間も含めれば約40年間も本郷にいたことになる。この間、師、同僚、研究室スタッフ、学生、事務官、技官の方々、秘書などなど、本当にいろいろな良き人達に恵まれ、充実した教育・研究生活を送れたことを心から感謝している。40余年の東京大学での生活のなかには、いろいろ思い出も多いが、ここではその思い出に絡んで最近気になっていることを二つほど書いてみたい。

私が理学部の化学教室旧館に初めて入ったのは、昭和29年5月、高校生二年生の時であった。中学の理科の先生や高校一年生の化学の先生の影響もあって、その頃から化学が好きだったので、五月祭の理学部化学科の展示を友人と見に来たのである。展示は確か、今はもうないが200号室という大きな教室で行われていたと思う。今考えると、多分 Warburg 検圧計がガタガタと音を立てて動いていて、学生が行ったその説明に感心したような記憶が残っている。しかし、展示より鮮明に憶えているのは、一階から二階に上る階段のあたりにいろいろとものが置いてあって大変暗く、そこに「東大もと暗し。注意」と書いてあったことであつた。

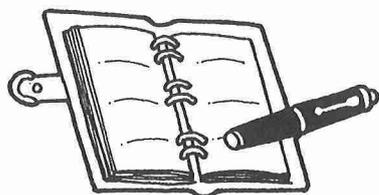
さて、それから40数年、教育・研究のための居住環境はどう変わったであろうか。大学の建物の老朽化が進み、大学の貧窮ぶりを社会に強く訴え続けられた有馬総長の時代には、国会議員や財界、実業界の重鎮の視察が多数あつた。理学部では、古い一号館を見た後、大学の建物としては新しく比較的ましな例として、化学新館（今は化学西館と呼ばれている）の2階にある私の研究室に寄るのがメニューコースとなっていた時期があつた。テレビ朝日のニュース・ステーションからの取材もあり、ちょうどその頃私の研究室にドイツから可愛い女子学生が留学していたこともあってテレビ局は、その子の「東京大学のような世界の一流の大学でありながら実験室が大変狭いのには驚いた」といった発言を喜んで放映していた。その後、一号館の建直しが決まり、最近完成をみたのは誠に喜ばしいことであるが、大学、とくに研究室の狭隘さは相変わらず未解決である。その解決には時間が

かかるであろうから、粘り強く努力するほかないが、ここで私が言いたいのは、建物の維持・管理の問題である。これにも無論お金が必要であることはわかっているが、しかし研究科・学部の構成員がその気になれば何とかできる問題も多々あるのではないだろうか。尾籠な話で恐縮であるが、例えばトイレである。欧米からの訪問客がきたときに、化学西館が4号館と共有しているトイレに案内するのに躊躇するのは私だけであろうか。換気が不十分で臭く、しばしば蛍光灯がきれ、水が床にたまり、鏡も錆びて汚らしい。細かいことではあるが、大学に生活する教職員、学生の居住環境をきれいにするのにもう少しお金を使っても良いのではないだろうか。この種のことは当然理学部の他の建物にもかなりあるであろうが、相談して順次解決できるのではないだろうか。その意味で、最近、床のクリーニングを定期的に行うことになったのは歓迎すべきことと思っている。

もう一つの気になることは、国際交流の問題である。東京大学は現在100に近い数の外国の大学と学術交流協定を結んでいるようであるが、その一つにフランス、ストラスブールのルイ・パスツール大学 (ULP) との協定があり、1989年にスタートしている。1993年、設立時からこの協定の世話をしていた岩澤康裕教授から私が世話人を引き継いだ。この協定は、東京大学におけるこの種の協定の中では最も活動しているものの一つと考えられる。これまで本学の教官が客員教授として一年に4名程度、計約40人ほど ULP に招聘されている。一方で、本学の経費で ULP から招聘したのは僅かに11名で、それも定期的に招べたわけではなく、発足した年に有馬総長の特別な計らいで100周年記念事業関係の経費により5人を、1996年に東京大学学術研究奨励資金を申請して運良く当たり、東大と ULP の合同シンポジウムを開催して6人を招べたにすぎない。毎年招聘するための経費が用意されているわけではなかったため、ULP 側からの希望に応えるのに世話人としてかなり苦労した。この間、教官側の個々の努力で日本学術振興会の招聘教授などとして何人かの ULP の教官が本学に滞在できたものの、継続的に計画が立てられる状態ではなかった。しかし、教官の交流は現在ではいろいろな形で可能性が増えてきており困難ではあるものの何とかなると思われるが、今後問題となるのは学生の交流（2、3ヶ月から1年程度の相互滞在）であろう。ULP との交流協定でも教官、学生の双方について行うことになっているが、現実には学生の交流が行われたことはない。一昨年の合同シンポジウムに参加した ULP の教官のなかにも学生の交流に強い意欲を持つ人がおり、実際最近になって学生の交流

を具体的に提案してきている。私の研究室にも何人かのヨーロッパ、アジアからの学生が滞在したが、その経験からも学生の交流の意義は大変大きいと思っている。全学的に事を進めようとするとなかなか時間がかかると思うが、理学系研究科・理学部レベルなら話はずっと進めやすいと思う。国際交流委員会などで具体的に検討を始めてはいかがなものだろうか。

以上、これらの問題はともに理学系研究科・理学部が何にお金を使うかという点で共通していると思う。今後の議論の出発点になればと思い書かせていただいた。最後に、理学系研究科・理学部におられる皆様が柏キャンパスへの展開も含め21世紀への新たな飛躍に向け活躍されることを祈って筆をおく。



## 岡崎廉治先生を送る

川島隆幸 (化学専攻)

takayuki@chem.s.u-tokyo.ac.jp

岡崎廉治先生は本学理学部化学科を卒業後、本学大学院で故島村修先生の薫陶を受けられ、昭和41年博士課程を修了し、理学博士を授与されました。直ちに、設立2年目の稲本直樹先生（東京大学名誉教授、現神奈川大学教授）の研究室の助手として採用され、研究室の立ち上げに尽力されました。昭和55年4月助教授になられた後、稲本先生の御停年退官の後、平成元年4月理学部教授に昇任され、化学科有機化学第一講座（平成5年4月大学院重点化による改組後は有機化学講座有機ヘテロ原子化学研究室）を担任されました。

以後、学内では環境安全センター運営委員会委員など、理学系研究科では理学部化学科長をはじめ、企画委員および人事委員長などとして東京大学の発展のために貢献されました。また、高周期14族元素化合物に関する東大国際シンポジウム開催に際しては組織委員として、ルイパスツール大学およびシンガポール国立大学とのシンポジウム開催に際しては組織委員長として尽力され、国際交流に努力されました。学外にあっては日本化学会理事、有機合成化学協会理事およびケイ素化学協会常任理事、日本学術会議化学研究連絡委員会委員および学術審議会専門委員などとして積極的に活動されました。さらに、日本化学会速報誌および有機合成化学協会誌の編集委員長を務めました。また、英国王立化学会日本地区代表、種々の国際学術誌の編集委員を務められているほか、多くの国際会議の国際組織委員として活躍されておられます。最近では第17回有機硫黄化学国際シンポジウムの組織委員長として開催に尽力されるなど、基礎有機化学の広い分野でその発展に大きく貢献されました。

先生は、硫黄化合物に興味を持ってこられ、炭素-硫黄二重結合化学種、中でも最も合成が困難とされていたチオアルデヒドを世界で初めて、合成・単離に成功されました。また、その高周期類縁体であるセレンアルデヒドの合成にも成功され、これらの業績に対して昭和62年には「特異な $\pi$ 電子系をもつ有機リン、硫黄、セレン化合物の研究」により日本化学会学術賞を受賞されております。ここで用いた立体保護という手法が、教授にご就任以来の先生の有機ヘテロ原子化合物の合成、構造、反応性の研究の本流として流れ続けているように思えます。保護基としてさらに改良を加えて、ケイ素資源の有効利用とも言うべきケイ素原子を要所にちりばめた2,4,6-

tris[bis(trimethylsilyl)methyl]phenyl基を開発され、合成が非常に困難であると予想された高周期14族元素（Si, Ge, Sn, Pb）と16族元素（S, Se, Te）間の二重結合化学種の合成研究に挑戦され、反応性に富んだいわゆる“重いケトン”を世に送り出すことに成功されました。兄弟喧嘩をしないよう（速度論的安定化）、また仲良く手を繋ごうとするものは拒まないよう（本質的反応性の維持）、周到な配慮がなされており、正に先生の包容力ある人柄が現れているようであります。先生は他に高配位典型元素を含む複素四員環化合物の研究および新しい反応場としてのボウル型およびカプセル型分子の開発研究などでも業績を挙げられました。

研究室の院生、学生らは先生の「そこまでいったら取ろうじゃない。」の一言をいただくべく研究に励んできたように思われます。というのもこれまで困難だと思われていた化合物が、その言葉が発せられた後、ほとんど例外なく、合成・単離に成功していることを皆知っていたからです。勿論、これにはいわゆる“間接効果”などが必須であったことは否めません。研究室自体にもこの効果が現れ、ごく最近、最も重い安定元素であるビスマス間の二重結合化学種、ジビスマステンの合成がScience誌に掲載されたことを端緒に、Chem. Eng. News誌上などを盛んに賑わしており、先生の退官を祝福している観があります。

最後に先生の趣味について書き添えたいと思います。先生はスポーツマンであり、登山をはじめ、野球、スキーがお得意です。中でも野球に関しては研究室対抗や他大との定期戦において、島村研究室時代から昨年の秋の3大学4研究室対抗最終戦まで「生涯一捕手」に徹し、プレーされてこられました。その体力、体型を保たれている秘訣は、日頃の生活の中にあり、多分先生と一緒に歩いたことのある人はお気付きのように、競歩の選手顔負けの歩き方の速さにあると思います。

4月からも引続き私立大学でご研究を続けられると伺っております。歩かれる距離も今より若干長くなると思います。今後とも速歩に研ぎをかけられ、ご健康に留意され、益々活躍されることを祈念いたします。稲本研以来、長年にわたり貴重なご助言・ご指導を戴いたことに対し、心から御礼申し上げます。誠に有難うございました。

## 「新しい化合物を求めた30年」



齋藤 太郎 (化学専攻)  
taro@chem.s.u-tokyo.ac.jp

工学部応用化学科を卒業し、化学技術者になろうとしていた者がなんの因果か理学部教授になり勤務を終えることになりました。

しかしながら、考えてみますと理学部化学科とはいろいろなご縁がありました。

私の修士課程当時（昭和36年－38年、1961－1963年）大学院は化学系研究科であり、化学を専攻する理学部、工学部、農学部、薬学部の学生は、共通の講義を聴講しました。基礎化学の講義は主に理学部の講義を選択しましたので、理学部の先生や研究分野をよく知ることができました。東大に戻って間もない、藤原先生、田丸先生、大木先生などの若手教官や森野先生、島村先生、島内先生などの講義の様子を今でも思い出します。工学部の講義も受けたのでありますが、工業化学や化学工学の応用的色彩の濃い講義ばかりで、あまり印象に残っていません。ですから、大学院は講義に関する限り、理学部を卒業したみたいなのです。

理由はよく分かりませんが、非常によい制度と思われた化学系大学院が各学部の大学院に分れ、博士課程は工学系大学院を修了しました。大学院の博士課程2年の時、東京工業大学資源化学研究所の池田研究室に3カ月お世話になりました。その当時、ドイツ留学から戻られたばかりの気鋭の助手の山本明夫先生に、空気中で不安定な金属錯体の単離同定法をご教授願うためでした。この経験が一生の研究方向を決めたように思います。

博士課程修了後工学部助手となりましたが、1年半後（1967年）からラムゼーフェローとしてオックスフォード大学の無機化学教室に2年間留学しました。ラムゼーフェローシップは文部省の長期在外研究員扱いの特殊な奨学金で戦前から継続している制度です。水島三一郎先生が日本ラムゼー委員会の審査委員長をしておられ、面接試験ではじめてお目にかかりました。幸いにも合格し

て留学したわけですが、出発に先立ち当時物性研におられた井口洋夫先生にいろいろ留学心得をご教示いただきました。先生はラムゼーフェローの大先輩であります。

留学中にたまたま佐佐木行美教授が立ち寄られ、大学町をご案内したのがきっかけで、帰国後理学部化学教室の助手に配置換えになり、助手、講師、助教授として12年間過ごしました。

大阪大学基礎工学部合成化学科には昭和57年（1982年）に赴任し、また平成元年に理学部に戻り今日に至りました。最近大阪大学基礎工学部の退官教授と現職教授の新年交歓会に出席する機会がありました。基礎工学部には6年余り勤務しただけですが、顔見知りの教授の方々が多数出席してなつかしく思いました。

無機化学、錯体化学、有機金属化学の発展の歴史を概観しますと、新規の結合様式を持つ鍵化合物の発見が飛躍的発展の契機であった場合が多いことに気がつきます。

学生の頃はまさに、錯体化学の変貌期であり、フェロセン、チーグララー触媒、二窒素錯体などの発見が相次ぎ、これらが時代を画したのです。また銅酸化物超伝導体やフラーレンの発見が最近のよい例でしょう。私どもは、合成化学の中で遅れた分野である、金属－金属結合を有する化合物の合成に取り組んできましたが、優秀な学生諸君のおかげで、いくつかの重要な化合物を合成できたと思っています。

化学はあらゆる物質科学の基礎ではありますが、研究対象が原子・分子でありマクロな自然物ではありません。

しかし、学生時代の化学と異なり、今では化合物の構造が種々の分光法や単結晶X線構造解析で直ちに解析でき、その結果はコンピューターグラフィックスで目に見えるようになりました。こうなると、目に見える建築や機械、天体や生物などと同列になり、化合物は目に見えないから、訳が分からないということが少なくなります。古典的合成や分析も依然として基本的重要性を失っていませんが、最新の機械により分子や固体構造に触れさせることも、若い学生諸君を化学に引きつけるのに重要な役割を果たすと考えられます。理学部の学生諸君の真剣な勉学と立派な研究成果を期待しながら退官いたします。先生方、事務の方々に長年お世話になり、まことにありがとうございました。

## 齋藤太郎先生を送る

井本英夫 (化学専攻)

imoto@chem.s.u-tokyo.ac.jp

齋藤先生にはじめてお目にかかったのは私がまだ学部3年生のころ、1971年のころでした。今も覚えているのは、学生実験で、窒素雰囲気下で酢酸クロム(II)を合成するグループ実験を指導していただいた時のことです。お手本としていくつかの実験操作をやって見せて下さったのですが、それが何か妙になめらかで、無駄のない操作でありました。それまで単に実験のマニュアルに書いてあることさえやれば良いのだといった調子で、がさつな実験ばかりをやっていた目からすると、ある種の別世界を感じさせるものでした。その後しばらくして佐佐木教授の研究室(無機合成研究室)に入れていただき、そこで当時助手でいらっしゃいました齋藤先生から直接指導していただくことになりました。そのころの齋藤先生はイギリス留学から帰国されてまもなくの時期であり、不活性雰囲気下の実験技術を研究室に移植されているころでした。このためにはいろいろなガラス器具などが必要なのですが、あまりお金のない研究室でしたから器具類は常に不足気味であり、その分だけいろいろ工夫をするということを当時の学生は学びました。この時代には、窒素分子が金属に配位した錯体や、水素原子が配位した錯体の合成を中心に研究を進めておられました。これらの錯体は、窒素固定反応や炭化水素の異性化反応・水素付加反応の中間体のモデルとなるものであり、錯体を合成することによって、どうすれば配位子との結合を制御できるかを調べようという方向の研究でした。この時期は先生御自身もよく実験しておられました。先生が帰られたあと、よくかたづいた実験台の上のフラスコを覗きながら、今度は何を合成しようとしていらっしゃるのだろう、と思ったものでした。

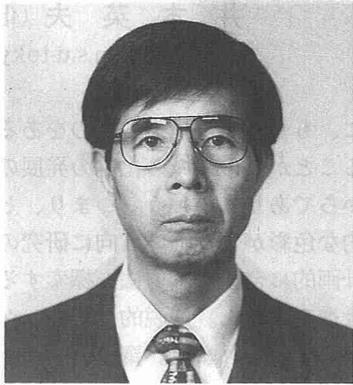
1982年秋に齋藤先生は大阪大学基礎工学部に教授として赴任され、その1年あまり後に、私を助手として採用して下さいました。阪大に移られてからは、金属クラスター錯体の合成を始められました。この金属クラスター錯体とは3個以上の金属が互いに結合した骨格をもつ分子のことで、当時、単核の錯体にはない触媒反応が起こるのではないかと期待されておりましたが、齋藤先生は反応を調べるといふより、新化合物の合成それ自体に研究の焦点を置かれました。といえますのは、さまざまな金属クラスター錯体が合成されつつありましたが、偶然できたというものが多く、クラスター錯体を作るための確かな指針というものが何もなかったからです。有機化

合物のように、もくろんだ構造のもののある程度計画的に合成できることがこの領域の化学の発展の要であると考えられたからでありましょう。つまり、どちらかというと言学部的な色彩がより強い方向に研究の中心を移されました。計画的に合成する方法を探索するのは必ずしも計画的には進みません。逆説的ですが、かなりの直感的な見通しが必要とされます。齋藤先生の見通しの良さを証明する成果として、 $[\text{Mo}_6\text{S}_8(\text{P}(\text{C}_2\text{H}_5)_3)_6]$ (モリブデンの作る八面体に6個の硫黄が配位した錯体)の合成があります。この合成は、三角形のクラスター錯体を二つ上下に繋ぐことによって八面体のクラスター錯体ができるのではないかという、齋藤先生の単純明快なアイデアが的中したものでした。これは有名なシェプレル相化合物の中身を切り出してきたような構造を持った重要な化合物で、この化合物の合成は世界のあちこちの研究グループを悔しがらせたようです。

1989年に齋藤先生は再び東京大学理学部化学教室に戻られました。この第二の東大理学部時代には、モリブデンなどの金属クラスター錯体の合成をさらに発展させ、いくつものクラスター錯体を合成することによって、クラスター錯体の合成パターンがおぼろげながら見えるような段階にまで、この分野の化学を開拓されました。それとともに金属クラスター錯体に関するいくつかの総説を、多くの資料を集めて執筆されました。いずれも手間のかかった労作で、その方面の研究者には貴重なものです。そのほか、大学初年生用の無機化学教科書や、理化学辞典の編集・執筆など、数多くの原稿依頼をすべて手を抜くことなくこつこつと果たされてきました。こういった作業は、普段はそれほど大きなことをしていらっしゃるように見えないのですが、終わってみると、すごいなあと思う御仕事になっています。きっと、筋を通して仕事をするということが大事なのだろうと思いますが、このあたりの極意は到底うまく学べそうにありません。

不活性雰囲気下で錯体を合成するのが珍しかった時代から今日まで、先生は新しい型の錯体を合成し続けてこられました。それを支えているのは、絶えず新しい知識を取り入れる努力と、それを基にした的確な直感であると思います。先生の知識と直感の絶妙のバランスのありかたを通しては、私は無機化学の研究の方法を教えたいただいたと思います。最後に齋藤先生の御研究の発展と、御健康をお祈り申し上げます。

## 大学を去るにあたって



新井良一 (生物科学専攻)  
araryo@biol.s.u-tokyo.ac.jp

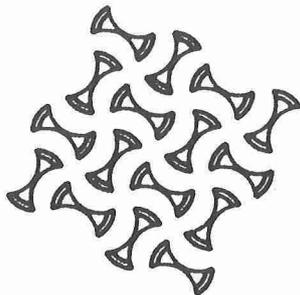
新しい大講座の開設に伴い東大へ赴任してきたのは3年前のこと、研究室の整備の前に人事が先行したため、進化多様性生物学大講座の教官9名は理学部2号館、小石川の附属植物園、三崎の附属臨海実験所に分かれ、私の研究室も仮の部屋（旧動物学専攻の名誉教授室）で、この状態が2年間続きました。一昨年、地理学専攻の理学部5号館への移動に伴い、大講座の全員が理学部2号館2～3階の南翼の研究室に落ち着くことが出来たのは、平成9年3月のことでした。3階南翼の研究室は、かつて、動物学教室が使用していた所であり、私の在学していた当時、「進化」は科学と見なされにくい風潮のあった教室跡に、進化多様性生物学大講座が居を構えるに至ったことは、学問の変遷の激しさを感じずにはいられませんでした。この3年間、他の大講座の施設や総合研究博物館の標本を利用させていただき、なんとか研究を続けることは出来たものの、柏キャンパス新研究科の難問をはじめとする多くの会議に追いまくられ、気がついてみ

ると、目の前に退官が迫っていました。

それにしても、1995、1996年の兩年、小形の淡水魚であるタナゴ類の調査のため中国各地へ出かけ、これまで、標本の貸借がきわめて困難であったため、中国と日本で別々に研究されていたタナゴ類を同一の目でみることにより、種のシノニムの整理が進み、世界のタナゴ類を扱うことが出来るようになったこと、コイ目の核型進化を明らかにする上で、特殊なタイプであり重要な、染色体数46の種を発見出来たこと、形態による系統と分子系統を並行して研究したことにより両アプローチの長所、短所を具体的に認識でき、双方の総合への足がかりをつかむことが出来たことが、研究面での収穫でした。

動物科学・植物科学・人類科学・広域理学・進化多様性生物学などからなる生物科学専攻が発足してから3年、組織改革の成果を評価するのは時期尚早だと思います。進化多様性生物学大講座のはっきりした将来像が確立する前に私は大学を去ることになり、生物科学専攻や理学系研究科に対し、私なりの思いを語る適切な言葉が見あたりません。今は、立ち上がったばかりの進化多様性生物学大講座の発展を外から静かに見守らせていただきたい気持ちで一杯です。

最後に、この3年間、組織の一員としてお役に立つことが少なかったことを残念に思いますとともに、この場を借りて、これまでお世話になった東京大学・大学院理学系研究科の皆様へ感謝申し上げます。



## 新井良一先生を送る

雨宮 昭南 (生物科学専攻)

shonan@biol.s.u-tokyo.ac.jp

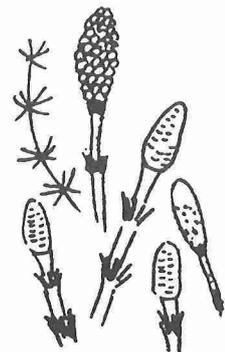
新井先生は昭和13年東京都でお生まれになり、昭和32年4月に、東京水産大学増殖学科に入学、卒業後、昭和36年、東京大学大学院生物系研究科動物学専門課程の修士課程に進学されました。修士課程終了後、半年間、水産庁東海区水産研究所に在籍された後、昭和38年9月より国立科学博物館動物研究部に研究官として赴任しました。その後、昭和42年に「淡水魚のステロイドホルモンの生合成に関する研究」によって理学博士の学位を受けられました。国立科学博物館においては、魚類の新種の記載から研究を始められ、その後、魚類における上位分類群の分類法の客観性を求めて、染色体による核型分析の研究に移りました。特に、海水魚の核型分析については、当時は内外にほとんど例がなく、新井先生の独壇場の形になっていました。この間、国立科学博物館の上野から新宿への移転などもあり、随分と苦労されたと聞いております。

平成7年4月、国立科学博物館動物研究部室長を経て、東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻に新設された進化多様性生物学大講座に教授として赴任されました。近年は、淡水魚のたなご類の類縁関係と分類に関する研究を行ない、分類における形態形質と分子形質の融合をめざしておられました。研究の性質上、野外での調査も多く、昭和39年には、半年にわたり南極洋の生物調査に参加し、魚類や、オキアミ等のプランクトンの採集を行ない、それらの分類を担当しました。この航海では、タスマニアからロス海に至る暴風圏の通過で船酔いに苦し

められたと伺いました。しかし、夏の日々の南極洋における氷山の美しさは、今でも忘れられないそうです。昭和61年から平成5年にかけては、東南アジア、主に、タイでハゼ、ギンポを中心として魚類の調査を行ないました。近年では、中国内陸部をしばしば訪れ、中国科学院の武漢水性生物研究所および上海水産大学と共同で、淡水産魚類の調査を行なっています。

先生は、魚類学会、分類学会などで、評議員、学界誌の編集委員、編集委員長等をつとめられ、また、日本学術会議動物科学研究連絡委員としても活躍されました。

東京大学での在任期間は3年間でしたので、この間に面倒を見られたお弟子さんも修士課程の二人だけでしたが、それぞれに淡水産魚類について、骨格系に基づく分類と、遺伝子解析による分子系統の研究を指導しました。また、在任中は、東大博物館運営委員、理2号館館長等を務め、最後の1年間は、進化多様性生物学大講座の大講座長として、温厚な人柄で新設部門の難しい運営にあたられました。これからは、しばらくの間、晴耕雨読の生活に入り、これまでの活躍の疲れを癒され、その間は、趣味の読書や日本画の観賞、奥様の運転する車でのドライブや夏山の山歩き等を楽しまれると伺っております。また、これまで運営などに関わりの深かった大学博物館には、魚類の分類面などで、これからも折りにふれ協力してゆきたいとのご希望です。第2の人生を十分に楽しまれるようにと願っています。



## シモコシ・回路の完成を追い求めた日々

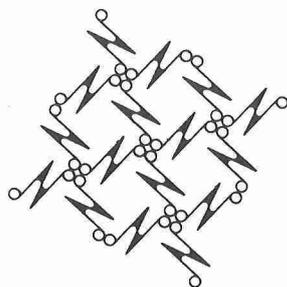


霜越 文夫 (物理学専攻)

退官にあたって、先ず思い出したのは原子核研究所に入所した第一日目の日でした。その日は朝早く原子核研究所に着いたのですが、研究者が徹夜で実験をしていました。そしてマシンタイム中は徹夜で実験することになっていると聞いて改めて仕事の重大さを認識したものでした。研究所ではエレクトロニクス部門に配属され、ここで初めて電子回路をゼロから学びました。当時はまだ電子管で回路が組み立てられていました。この回路の保守点検と改良が入所したばかりの若者、私を含めて四人の仕事であり、岩のように重い測定器を一つの部屋に集めて修理しました。林巖雄教授はじめ他の多くの良き先生方や先輩方に応援して頂き、後につながる大変重要な経験となりました。これが私には良かったように思います。ここで一通り原子核実験で使われる測定器を学び、それをトランジスタで組み上げました。坂本教授、高木教授、山越教授の仕事で作った回路を持って、数回鋸山へ行ったことはいい思い出になりました。この頃は、作った回路を物理学会や理化学研究所で発表しました。これが買われてか後に釜江教授より話があり、理学部の物理学教室の回路室に配属されました。ここの物理学教室では物性物理から原子核実験までの幅広い、独創的なエレクトロニクスを志しました。当時、必要な回路は高価でなかなか手に入らず、また第一線で活躍されている先生方の

要求は非常に高いものでした。おかげで性能が抜群の簡単な回路を短期間の内に組み上げられるよう技術的に鍛えられました。最も印象に残るのは山崎研究室が自分の作った放射線用の回路を大量に使ってくれたこと、さらに学生実験用にも作ったことです。マイコンの時代に入るころには、手づくりのマイコンの入った回路も作りました。アセンブラは買えず全て機械語の表から引いてプログラムを作りました。沢山作った回路の中で忘れられないものの一つは永嶺教授に頼まれた回路が、論文に成りました。おかげでそれが使われているイギリスの研究所へ招待されました。1970年頃から学習院大学、その後東京農工大学へ非常勤講師として行くようになりました。原子核研究所時代、回路室時代の実践をまとめる意味でとても有意義なものでありました。そうこうしているうちに、各研究室では測定器を買えるような時代になり、丁度その頃回路室から研究室へ応援に来て欲しいということで表面物性の井野教授の井野研究室に移りました。初めは研究室の大門先生から測定器とマイコンのインタフェースの製作を頼まれました。しばらくして井野研究室に馴染んだころ表面物性の研究に参加させていただきました。そこで与えられた研究題目の成果をこの3月の物理学会で発表することになっています。井野先生は昨年宇都宮大学に移られましたが今も先生には色々と御指導して頂いています。井野先生と学生諸君と研修小旅行に行ったこと、また海水浴に行ったこと、輪講の時間等は楽しい思い出となるでしょう。

井野教授、大門教授、長谷川助教授、高見助手、長尾助手、それに私とかかわりがあった原子核研究所の皆さん、回路室の長沢さん、樫村さん、物理学教室の事務の皆さんどうもありがとうございました。



## 霜越さんを送る

長谷川 修 司 (物理学専攻)

shuji@surface.phys.s.u-tokyo.ac.jp

霜越さんは、昭和45年に旧原子核研究所から物理学教室の回路室に移って来られ、昭和61年まで、たくさんの研究室の要請に応じて種々の電子・電気回路を製作されました。その後、井野研究室に移り、実験装置の制御関連の回路製作およびX線検出に関する実験などをされてきました。

霜越さんが製作された回路は数限りなくありますが、代表作を列挙すると、パルス増幅器・Timing SCA (山崎・中井研、野上研、三須研、その他)、マルチプル・タイム・デジタルコンバータ (山崎研)、前置増幅器・主増幅器 (中井研、学生実験用)、電荷型前置増幅器 (釜江研)、演算回路 (橋本研、三須研)、メモリボード (堀田研)、シグナル・アベレージャ (鈴木 (秀) 研)、各種インターフェース (小柴研)、プログラマブル・ステップモータ・コントローラ (長澤研)、プログラマブル・F-V 変換回路 (飯田研)、超音波パルス発生器 (鈴木 (秀))、リファレンス入力付加算平均処理回路 (二宮研)、LBL 型前置・主増幅器 (藤井・釜江研)、デュアル A/D・タイマーカウンタ・インターフェースボード (和田研)、生理学実験用電気刺激装置 (若林研)、光子計数型画像計測装置 (PIAS) 用インターフェース (井野研)、qvt マルチチャンネルアナライザ用インターフェース (永嶺研)、極低温冷却 PIN ホトダイオード型 X線検出器 (蓑輪研)、放射線計測用前置・主増幅器およびシングルパルスハイトアナライザ (学生実験) などなど多岐にわたり、物理学教室のほとんど全ての実験研究室がお世話になりました。

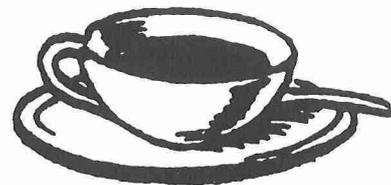
霜越さんは、特に放射線計測・加速器実験関連の回路を専門とされ、「Shimokoshi Clock」と呼ばれている独自の方式によるマルチプル・タイム・デジタルコンバー

タは、特に有名です。それは現在も筑波の高エネルギー研究所でたくさん使われており、さらにイギリスのラザフォード研究所にまで輸出されています。7年前には、ラザフォード研究所で使っている Shimokoshi Clock 回路が故障したので、その修理とノウハウの伝授のためにわざわざイギリスに招かれたほどです。また、東京農工大学および学習院大学において非常勤講師を勤められ、その豊富なエレクトロニクスの知識と経験をもとに講義をされてきました。

井野研究室に移られてからも、固体表面から励起放射される X線を検出するため、シリコン結晶を使った検出器の開発や、光電子分光装置の制御システムインターフェース、分子線エピタキシー装置の制御システムの製作、走査トンネル顕微鏡用の超低雑音前置増幅器の開発などのかたわら、自ら電子回折の実験もされて、カルシウムおよびストロンチウムの吸着したシリコン表面の構造解析の研究もされました。

私がかつ知っている霜越さんの趣味は、写真とコーヒーです。非常に高級なカメラをいくつかお持ちで、アマチュア写真撮影会に出られたりしていました。また、井野研究室総出の旅行やお花見、歓送迎会の記念写真は、いつも素晴らしい出来栄で、多くの卒業生から思い出として大切に保管しているとの話をうかがいます。霜越さんの本格的なコーヒーは格別で、へたな喫茶店よりずっとおいしいものでしたが、最近、健康診断で中性脂肪が多いと警告されてから、コーヒータイムの回数がめっきり減ってしまったことは残念です。

霜越さん、長い間ほんとうにお世話になりました。これからは健康に留意され、ますますのご活躍を期待しています。



## 再 見！ 一東大・小石川植物園一



小 嶋 壯 介 (植物園)

昨年、長田園長から依頼されて「理学部広報」に齋藤事務官(植物園)を送る言葉を書かせていただいたと思ったら、もう自分の定年退官の言葉を書く時期が廻ってきました。正に「光陰矢のごとし」歳月の速さを改めて実感しています。

私の理学部勤務は通算7年になります。始めは、西島学部長・有馬学部長の時代の5年間で、2度目が今回の小石川植物園の2年間です。

しかし、後半の2年は慌ただしく過ぎ去り、1年目は、イチョウ精子発見100周年記念行事、公開温室のガラス補修、研究温室の複合環境分布システム、植栽分布記載システム。2年目は、正門受付その他の問題、日本庭園の浚渫・護岸工事等の応接に追われる日々でした。

しかし、植物園もお蔭様で平成10年4月1日から東京大学大学院理学系研究科附属植物園とネーミングを変更して新しいスタートとなります。

植物園を去るにあたり、「良薬は口に苦し」の譬えのとおり丁度いい機会なので植物園のアキレスケンを「広報」に残して置こうと思います。

外部から見る植物園は素晴らしい環境を備えており、四季、春—サクラ 梅雨—アジサイ 夏—サルスベリ・フヨウ 秋—ハゼ・イロハモミジの紅葉 冬—ウメ・ボケ そしてウメ・ギンナン・カキ・カリン・ユズ等の果実収集どれもこれもアトラクティブなものです。

しかし内部で生活してみると、研究部は研究費がない。育成部は技官の数が不足していて広い樹木園が3人・温室3人ではとても手が回らず、仕方なく60歳過ぎの高齢の方を安い賃金で雇用して辛うじて運営している。

事務部もこれまた人手不足で正門の受付業務を育成部と同様、高齢の方を安い賃金でお願いして運営している。

また、植物園は1年中誰かが出勤している。植物に水をやらないと枯れてしまうからである。盆も正月もなく育成部は人数が少ないので出勤回数が多く大変です。事務の人も公開業務の団体受付のため交代で土曜日は出勤している。

美しい植物園ですが裏面はこのような問題が山積しておりその管理は大変です。特に冬場の雪害、夏から秋へ掛けての台風、心ない入園者のいたずら等はヒヤヒヤものです。総括すると、この2年理学部のお骨折りによりにかなりの個所が改善され植物園の充実化が図られましたが、どうしても生活関係経費が不足し、光熱水量電話等を支払うと後は何もできない状態なので植物園の運営は大変です。

こういう状態を植物園も手を拱いてただ見ているわけではなく、園長始め管理的立場の人は予算獲得に奔走してますが中々思うようにはいきません。

このような戯言を延々と述べると理学部の方々にご迷惑を掛けることになろうかと思いますが、私も現在の東大を取り巻く情勢を多少理解しており問題解決は至難の業だと思っていますが少しでも植物園の運営が改善されればと願っています。

終わりにあたり、今の日本は歴史上経験したことがない未曾有の大変革の情勢の渦中にあり、今後どうなるか見通しが見えない時期に退官させていただくことは非常に申しわけなく思っていますが、定年前2年間のけじめの年を江戸屈指の景勝の地であった白山御殿の跡地で勤務させていただいたことは、中国の故事「人間万事塞翁が馬」を平成の時代に再現したような錯覚を覚えて、メンタル面で非常に有益でした。改めてお礼申し上げます。

筆を置くにあたり、園長を始め研究部・育成部・事務部(日光含む。)、又理学部と東京大学の各分野でお世話になった皆様方のご健康と今後のご発展をお祈りしてお別れの言葉とさせていただきます。

## 小嶋壯介事務主任を送る

下園文雄（植物園）

小嶋壯介事務主任ご退官おめでとうございます。東京大学に奉職されて33年2か月。私が初めてお会いしたのは、昭和56年4月のことでした。小嶋さんが理学部の経理掛長としてご赴任され、昭和61年4月、生産技術研究所にご転任されるまでの5年間、いつもニコニコと笑顔を絶やさずに気軽に接して頂き、植物園のため、また、個人的にもいろいろお世話になったことを思い出します。

その後、小嶋さんは平成8年4月から平成10年3月まで、植物園の事務主任としてご就任され事務管理等にあたられました。以前、理学部に居られた経験から、着任早々から精力的に仕事をこなされ、施設の改善や工事、大イベントなどの事務処理を行われてこられました。それらについて思いつくままにご紹介させていただきます。

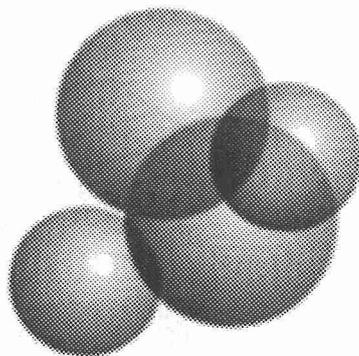
植物園には裸子植物のイチョウにも精子のあることが、世界で初めて発見された大イチョウがあります。小嶋さんが着任された平成8年は、平瀬作五郎先生がイチョウの精子（精虫）を発見して丁度100年目にあたる年でした。この世界的な発見を記念して、植物園では国際シンポジウムを含む記念式典とイチョウ精子発見百周年記念市民国際フォーラムを開催することとなり、開催準備のため予算面での要求や折衝、会場設営などの指揮をとられ、大成功のもとに式典を終わらせることができました。

また、植物園の公開温室は老朽が酷く、強風のためガラスが20mほど飛ぶ事件がありました。幸い人的な被害は無かったものの今後のことについて、不測の事態を

関係各所に訴えて頂き、応急的な工事を行って頂くことができました。しかし、ガラスを支えるサッシが腐食しており、本格的な改築にむけて概算要求をはじめ、理学部事務・関係各所に要求を行って頂いております。その他、平成5年に完成した研究温室の環境制御用コンピューターを導入して頂き、研究資料植物を栽培する上で大きな成果を上げることが出来るようになりました。それと、植物園内には沢山の植物種が植栽されております。これまで植栽図はありましたが、これをコンピューター化することが計画されておりました。これについてもコンピューターを導入して頂き、どの場所にどの植物が栽培されているか、本園にどのような植物が系統保存されているかが一目でわかる「植栽システム方式」が進められております。

また、植物園の歴史を物語る徳川5代将軍のご幼時の居邸であった白山御殿の日本庭園が残されておりますが、荒廃がひどく竣漂・護岸工事が切望されておりました。これもご努力によって、一部ではありますが改修されました。

これらのことは、小嶋事務主任が在籍された2年間のことの一部に過ぎませんが、職務に一生懸命に取り組まれたことを伺い知ることができると思います。本当に植物園のためにご努力頂き誠にありがとうございました。今後も時々はお来園いただき、叱咤ご指導して頂ければと思います。お体に気をつけて第2の人生をお楽しみ下さい。



## 云うべき事と云わざるべき事 — 流転 —



川村正義 (地球惑星物理学)

退職にあたって、私は永遠に凍結された螢が解き放たれたように、この春ようやく自由に飛べることが出来ます。

希望をもって理学部に来たのが昭和56年で、最初に給与掛、その後用度掛に籍を置きました。そんな折、事務長から「川村君、すまんが1号館の地球物理研究施設に3か月程行って、事務の仕事を手伝ってくれないか。」と声をかけられました。当時の施設長は福島直先生でしたが先生からも、是非地物研のために手伝ってほしいとの熱心なお話がありました。1～2日後に承諾をし、昭和58年10月中旬に地物研に移りました。結局、それ以来15年の間、勤務しました、早いものです。

当初、3か月でよかった地物研での勤務が、一体何故、15年もの間、惑星の中に閉じ込められてしまったのか、全く途方にくれておりますが、人生いつかは光をみるということがあると信じています。しかし、一方では、ブラックホールの中に光を見いだすのは不可能ではないかとも思っています。いまさら世迷い事と笑われるかもしれませんが、私はこのままで良いと現状に甘んじていたのではありません。

こういう事を云うとやっかみにしか聞こえないと思いますが“見ザル、聞カザル、云ワザル？”様々な人達がありました。ひとつひとつ取り上げてみても氷山の一角であり、その方達も現役の方もいますが多くは退職いたしました。その中の多くは人の心を理解できる人では無かったように思います。自らを正当化し、美化し、実力があるように振る舞っているのを見ると、何故かうら寂しさを感じました。私は公務員とは、公私の区別は“シャン”としたものであると自分に言い聞かせつつ1号館4階で15年暮らして来ました。この間を今振り返ると感謝せねばと落涙することも多々あり、また被害妄想なのかと思う事もありました。時には心の健康を保つために汗を流したこともありました。

しかし、もう良い。遠い昔の静かな庭園に戻れるのだから。こんな思いは4階にお世話になったその時から決めていたような気がしていて、今は何故かホッとしたようにも思えなくもありません。

螢にも色々な種類があり、4階の惑星螢達が上等な螢達の住処である新1号館に移られ、更に想望にして肅々とより遠くに飛びかう姿が50年から百年後か或いはもっと短くて20年30年後に観られることと思います。

とりとめのない文章になりましたが、楽しかったこの15年余りの間、有難度うございました。理学部の皆様、心から深くお礼申し上げます。

最後に楽しかった事などは皆で話そう、話しましょう。さらうなら



## 川村さんのこと

飯島 健 (地球惑星物理学専攻)  
ijijima@gr1.s.u-tokyo.ac.jp

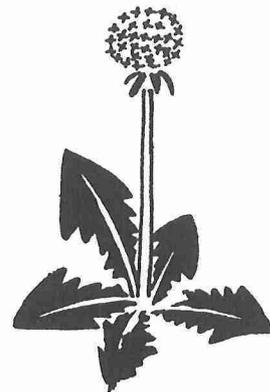
川村さんには大変軽快な雰囲気がある。うちの若い衆も大学院生も彼の年はよくわからなかったらしく、今度ご退官とは、皆気付かなかったようだ。元来スポーツがお好きのようで、学内のバレーボール大会では学生に混じってレギュラーメンバーとして活躍していた。「不忍池アスレチックス・クラブ」所属のメンバーでもあり、昼休みにはTシャツ姿や冬にはウインド・ブレーカーを羽おってジョギングを楽しんでいるのをよく見かけた。大相撲の季節になると夕方は欠かさず事務室のテレビをつけて観戦に切りかえていた。非常に話好き、話題も豊富、面倒見も良い人で、マラソン大会では沿道で交通整理をかって出たり、町内会の委員を引き受けていたこともあったとか。

川村さんは1984年7月用度掛から地球物理研究施設へ移ってこられた。地球物理研究施設は1991年に地球物理学と改組し、地球惑星物理学となった。研究施設にいた教官全員は以降、太陽地球系物理学講座の教官として、他の3講座(大気海洋物理学、固体地球物理学、地球惑星進化学)の教官連と共に地球惑星物理学を支えている。川村さんは、地球物理研究施設当時から現在の太陽地球系物理学講座時代にかけてトータル約13年半の長きにわたり、理旧1号館4階にある事務室で一人で経理一般をきりもりしてこられた。かなりの間、教官や院生とうまくマッチングがとれず孤軍奮闘して愚痴の2つ

も言いたくなかったことも多かったろうと思う。例外処理や締切後の処理をも躊躇なく頼み込む教官の不思議な合理主義にも合わせてくれた。最近では、皆が気軽に「ちょっと川村さん・・・なんだけど」と相談すると、「あっそうですか」と非常におおらかに引き受けて、非常におおらかに片づけてくれ、たまに計算が合わなかったというご愛敬もついていたとか聞いている。頭だけで腕力の方はあまりあてにならない院生連中を引率しては、大型ゴミの廃棄など環境整備にも尽力してくれた。

さて、川村さんの好きなものに酒というのがある。酒は種類を問わず好きだったようだ。研究室の飲み会では顔に照りののってきた川村さんが、院生を捕えては話し込んだり、宴もたけなわという頃になると、「もう最高」というかけ声やちょっとずれた発言で場を盛り上げていたようだ。最近は影を潜めたが、お酒がちょっと暴走気味になったことも…。宴会の後は時としてたっぷり休養を取っておられたようだ。これぞ、彼の養生訓の一頁、ストレス解消法とみた。

川村さんは、お宅では一男一女のよき父としてのほか、犬が大好きでシベリアンハスキーを飼っており、ご退官後は、大きくても言うことを聞く新しい動物(ダチョウ?)を配下に加えようと計画されているとか。長い間本当に有り難うございました。お元気で、楽しい新たな人生を是非送って下さい。



## 三崎臨海実験所退官にあたって



鈴木英雄 (臨海実験所)

実験所に入所して幾十年の歳月が過ぎ、ようやく退官することになりました。

想えば昭和28年、風光明媚な波静かな油壺の地、生物も豊富なこの地に就職することが出来、幾百幾千の生物、研究者、学生に接することが出来ました。四十数年間という長い月日であったはずなのに、今想えば短く走馬灯のように研究者達との面白かった時、苦労した時の出来事が浮かんできます。私に接してくれた多くの研究者および同僚の皆様にご心より感謝御礼申し上げ、これからの海洋生物学の研究の発展におおいに寄与されることをお願いし、退官のごあいさつといたします。

## 鈴木英雄さんを送る

佐藤寅夫 (臨海実験所)

satot@mmb.s.u-tokyo.ac.jp

臨海実験所の顔のような存在であった採集人の鈴木英雄さんが、この3月でとうとう定年退官されることになりました。臨海実験所では採集人は代々ファーストネームで呼ばれており、鈴木さんも“ひでさん”として親しまれてきました。

ひでさんは、昭和28年4月に非常にお若くして実験所職員（採集担当技官）となられ、しばらくは定時制の学校に通いながらの勤務でしたので、実に45年もの長きにわたってこの実験所ひとすじに尽くしてこられたこととなります。ひでさんは実験所近くの小網代漁村のご出身で、お父様は漁師でしたので、ひでさんも実験所に勤めることにならなければ跡を継いでいたであろうということです。臨海実験所の採集人は代々海外にまで名を知られた優秀な人たちで、ひでさんもそういう先輩に連れられて毎日海に出ているうちに、さまざまな海の生物の住み場所、採集方法などを会得されました。昭和46年までは実験所の水族館が一般公開されていたので、ひでさんはその係りも兼ねられ、手のかかる旧式水族館の維持に苦勞されました。昭和52年に先輩の関本貞治氏が退官された後は、3人の採集室スタッフのチーフとして、また実験所の採集船“臨海丸”の船長として採集業務を取り仕切ってこられました。

臨海実験所には毎年300人をこえる人々が研究や研修に訪れますが、われわれ教官は必ずしも訪問者すべてと

顔見知りになっているわけではありません。しかし、材料を調達してくれるひでさんたちと顔を合わせずに帰る人はほとんどいません。自分で採集に出る人には海の様子や生物の居場所を教え、要請があれば小船を操縦して同伴します。従って多くの人にとってひでさんこそが実験所の顔であったことと思います。学生実習にあたっては、担当教官以上に実習の成功に心を配り、悪天候で学生たちが海に出られないときには、代わりに雨ガッパを着て船で乗り出して、実習に困らないだけの材料を採ってきてくれるのが常でした。また、実験所の研究活動のものにも参加され、科研費を取って付近の無脊椎動物や魚類の生態調査、増養殖法の確立などをされたり、国立大学臨海・臨湖実験所技官会議の席でウミシダの産卵やウミホタルの採集法といったテーマでの研究発表をされたり、ヌタウンギの生態に関する詳しい調査の結果を共著論文にまとめたりしておられます。

ひでさんは一見陽気で太っ腹の親分肌ですが、実は非常に責任感の強い几帳面な性格です。昔私が学部の学生で、初めての实習で実験所を訪れたころはまだお若く鋭い感じがあり、「ちょっとこわそうな人だね。」と学生どうして話したりしたくらいです。お年とともに丸くなられて、学生に対してもすっかりやさしいおじさんになってしまいましたが、実験所の研究体制を円滑に保つことには常に気を配ってこられ、海が荒れた日には海水供給

システムの停止を心配して休日であっても返上して様子を見に来られるほどでした。お酒とカラオケを愛され、所内のコンパの折はいつも座を盛り上げようと一番気を遣われたのもひでさんでした。

ひでさんは年下の同僚たちの指導にも尽力され、幸いりっぱな後継者が育っているのでその点は安心しておられると思いますが、陽気でめんどろ見のよいひでさんのキャラクターが実験所から失われるのはやはりたいへん

さびしいことです。退官後にご自分の船を手に入れるなどして、やはり海にかかわる仕事にたずさわる計画をたてておられるようです。お元気で活躍のほどお祈りいたします。お住まいは近くですので、これからもひんぱんにお会いでき、私たちに海のこと、動物のことなどを教えていただけるのではないかと期待しています。ひでさん、長いことご苦労さまでした。

